

書評 水野章二著『里山の成立—中世の環境と資源—』

伊藤 啓介

(総合地球環境学研究所)

1. 内容

水野章二氏（以下、著者と略）の著書、『里山の成立—中世の環境と資源—』（吉川弘文館、2015）が刊行された（以下、本書と略）。著者は滋賀県立大学人間文化学部教授。本プロジェクトの中世史グループのサブリーダーを務める。その構成は以下のとおりである。

序章 里山をめぐる視点

第1章 中世の後山

中世村落と里山／後山の実態／さまざまな後山相論

第2章 荘園制と里山空間

山野支配と柚の変容／牧と荘園／和歌に詠まれた平安末期の里山空間

第3章 史料にみえる中世の里山

里山空間と生業／個別村落の里山空間／広域荘園における里山空間

第4章 里山空間の実態と絵画史料

寺域の後山／放牧と里山空間

第5章 樹林の多面的機能

樹林の機能とその評価／小さな里山屋敷林

第6章 中世里山の資源管理

山林資源の荒廃／環境管理とコモンズ論

終章 中世の生活環境

序章では、「里山」の定義と、生態系サービスや生物多様性保護など現代的な視点からの、「里山」の意味づけや価値が確認される。そのうえで、里山の成立と変容の過程を歴史的に解明し、資源の利用や管理の実態を具体的に検証しながら、里山の果たして

きた役割を検証することの重要性が指摘される。そしてさまざまな使われかたをする里山概念について、「狭義の里山（本書では「里山空間」と呼称される）」を「農用林・薪炭林などのように、人の手が加わった二次林」と定義する。さらに本書が扱う中世という時代について、「里山空間」が史料上に明確に姿を現わす重要な画期であるとしたうえで、本書の目的が、「里山空間」の成立過程をたどることによって、民衆の生産と生活の場であった村落における人と自然の関係を検討することにあることが示される。

第1章では、中世村落との関係を中心に、中世における里山（史料用語では「後山」）のありようが描かれる。古代における山野は、「公私共利」の原則にもとづく、国家の支配が及ばない場所であった。だが中世荘園制の展開とともに、荘園の領域が山野支配の単位となり、地頭などの支配権が及んでくる。その様子が丹波国大山荘・山城国玉井荘・同石垣荘、近江国伊香立荘・葛川、近江国木津荘・同河上荘などの例から読み解かれる。このような、中世村落による領域利用のあり方と中世荘園制の関係については、著者の持論である同心円状の村落領域分類（集落・田畠・近隣山・奥山）をもとに語られる（水野2000）。これらの領域とその村落による独占的な利用に、公的な外枠を与えるのが荘園・公領であるというのが著者の主張である。

第2章では、荘園制下における「里山空間」の管理の様相が取り上げられる。公地として独占的使用が禁じられていた「山川藪沢」に対する国司の支配が、紛争を通じて、荘園に含まれる「山野河海」への荘園領主の支配へと移り変わっていく。この様子が、琵琶湖・淀川水系に点在していた柚・山作所・牧の編制などを題材に語られる。このほかに平安時

代の里山の様子を語る史料として、平安末期の和歌に詠まれた近江国田上山があげられている。

第3章では、史料からは捉えにくい「里山空間」について、中世における実態が把握できる貴重な事例が検討される。まず山間部の生業の実態が近江国葛川の姿から語られる。さらに村落景観と「里山空間」の関係を、丹波国大山荘の例から論ずる。そして近江国木津荘の帳簿群から、内部に多くの中世村落を含む広域荘園における「里山空間」のあり方と、そこでの荘域を超えた入会関係や、山林としての利用、利用を巡る紛争と公地開発の様子が論じられる。さらに琵琶湖岸一体に広がる葦原では、肥料として藻草が採集されるなど、そこが田地とは異なる共同利用の場となっていたことが示される。

第4章では、絵画史料からわかる「里山空間」の実態が論じられる。「粉河寺縁起絵巻」と「井上本荘絵図」という、それぞれ絵巻物と荘園絵図という全く性質の異なる絵画でありながら、その現わす空間が接続している希有な例が紹介されている。そのほか、「西行物語絵巻」・「一遍上人絵伝」・「東郷荘絵図」から、「里山空間」における牛馬の放牧の様子が紹介される。

第5章では、古代・中世における樹林の利用とその多面的機能が論じられる。中世における山林は、単純な木材供給源というだけでなく、環境保全・土砂災害防止・水源涵養・快適な環境の生産など、多面的な機能を果たしていた。具体的には、防風・防火のための樹林、街道における並木などの環境整備について、南山城の光明山寺や近江の西明寺などの「寺領山林」の様子から論じられる。さらに美濃国大井荘では、水害防備林として屋敷地に竹林が整備されていた様子が指摘され、樹林については、材木・燃料・食料・肥料などの獲得という側面以外に、もう少し広くその役割を捉える必要があることが示される。さらには小規模な「里山空間」というべき「屋敷林（屋敷と樹林がセットになったもの）」が中世前期から存在していたこと、さらに安定した堤防が築かれる前である中世において、大河川の扇状地に存在した散村の屋敷林には、防風林としての機能だけでなく、水害を防ぐ役割があったことが指摘される。

第6章では、「里山空間」における資源管理の様子

が示される。さまざまな山野の資源を、さまざまな形で利用していた中世村落を支配することで、山間部から平地部の村落まで、荘園制領主支配が組み立てられていった様子が示される。

また資源管理の例として、植物の成長・再生速度を超えた村落による資源の利用の頻度が高まり、山林資源が後退していく様子も示される。たとえば、生駒山西部山麓の遺跡群からの出土花粉の分析や洪水痕跡の検討から、生駒山地では林が縮小して、16・17世紀にははげ山のような状態になっていくことが指摘され、その一因として、上流の生駒山地の植生破壊があげられる。これらの事例から、畿内・近国ではとくに15世紀以降、上流での植生破壊による土砂の流出激化が、下流での天井川形成・洪水被害の拡大につながったと著者は説く。

その一方で、丹波国山国荘や近江国朽木荘のように、中世を通じて京都の材木需要に応えつづけた地域が存在にも触れ、持続的な森林資源の利用を可能とした理由として、短期間では切りつくすことのできない山々を包摂していたことと、その地域の村落による広域的な山林管理システムの存在とを想定する。

「持続可能な資源管理」の見本ともいえるこのシステムについて、著者はその成立の条件として、村落共同体による規制の存在を想定する。近江国得珍保今堀郷における惣掟などを参考に、特定の山野の資源を利用した生業を長く継続できた地域においては、領主的な規制とともに村落や地域社会による諸規制が構築されていたことを指摘する。そこでは村落間や村落内部での身分差による利用格差などが存在し、原則として資源の利用は荘園内の荘官・荘民にしかみとめられていないことを示す。

終章では、近江国菅浦を題材に中世の生活環境について論じられる。耕地の少ない漁村である菅浦だが、先行研究がたびたび強調してきたような漁業や廻船・運輸だけの村ではなく、水田・畠作や商品作物の栽培、そして「里山空間」から得られる「柴木（燃料用木材）」の販売など、与えられた環境を最大限利用したさまざまな生業が営まれていたことが示される。このような菅浦の人びとについて、かつて網野善彦は非農業民集団の集住する「無縁の地」・「都

市的な場」と捉えた。だが著者は、菅浦において「水田農耕の生業全体に占める比重は（中略）相対的に低い。しかしそれは、農業の役割が軽視されていたということではない」と指摘する。さらに菅浦の人びとは確かに漁業や交通物流に携わっていたが、朝廷や日吉神社、山門や竹生島神社などと複雑な支配・被支配の関係を取り結んでもいた。そのことから菅浦は決して「無縁」な土地ではなかったのではないかと疑問を呈して、非農業民とその生業を村落から切りはなして理解する網野の議論を批判する。

最後に、それぞれに個性豊かな個々の地域の景観は、「里山空間」を包摂した村落において、農業・漁業・林業・流通などの生業を通じた、中世を含めたさまざまな時代の人びとの長期にわたる生産・生活のなかで形成され積み重なってきたものであり、その配置には一定の合理性や機能性、さらには災害への対応なども組み込まれていたと結論する。

2. 特徴と成果

本書は、いわゆる「里山」にあたる空間が現われてくる歴史的経緯を、豊富な事例をもとに描き出し、その生成と維持の社会的条件を明らかにして、「ローカル・コモンズ」として位置づけたものである。

現在、「里山」という概念については、持続的な資源の利用の様子など、環境保護の方面からさまざまな関心が寄せられている。中世において史料上には「里山」という言葉はでてこないのが、本書では「里山空間」という概念が用いられる。本書はこの「里山空間」を基軸に、中世の人びとがどのように環境と関わり、サービスをうけ、コントロールし、破壊したかを、村落というレベルで描く試みである。著者は、この「里山空間」が具体的にどのような条件の中で生まれてきたのか、その成り立ちを、歴史的事実と史料にもとづいてさまざまな事例を豊富に挙げることで、この問題に迫ることを試みている。これまで史料的に見出しにくいとされてきた「里山空間」での生業の様子を示す事例がつぎつぎと語られる様子は、数多くの事例を提示することで本質を抉り出す、網野史学やアナール学派の用いる手法を思わせる。

それらの事例に通底しているのは、あくまでも「里山空間」を生んだ中世村落とその活動を主題とすることである。中世村落が、地形などの自然条件、都市との距離などといった社会的条件、隣の村落との境界争いや、そのための中央との政治的結びつきといったさまざまな条件に掣肘されつつ、山野を利用してきた結果、偶然にできあがり、維持されてきたものが「里山空間」であることが示されている。

さて、タイトルに「里山」という用語を挙げている以上、現代における「里山」概念がもつ、「伝統的で『自然の持続的利用』がなされ『生物の多様性が保全されている』といった環境保護・自然との共生」といったイメージに対しても、本書は当然に注目している。なかでもとくに言及されているのは、いわゆる「コモンズ論」との関わりである。

里山における伝統的な共同利用慣行は、人間と自然環境の持続可能な関係が構築された自然共生社会の実現として評価されている。公的でも私的でもない、その共的な所有・利用のあり方は「コモンズ」と位置づけられ、その利用の共同性が資源の持続可能な利用にあたって重要な鍵と考えられている。このようなコモンズ論は日本史研究にも取り入れられており、とくに資源の管理・利用を共的に行なうことは、網野善彦の指摘した、山野河海の「無縁性」の議論とつながる部分があり、その点からも注目されてきた。

だが本書であげられている事例からは、中世における山野の資源利用が、そのアクセスに多大な労働の投下を必要としており、それは民衆レベルでも同様であることがわかる。著者はそのような前提のもとでの山野の資源利用は、どうしても独占を志向せざるをえないと指摘し、飢饉などの緊急時にみとめられる山野の資源への自由なアクセスを、中世における普遍的性質と考える必要はないとしている。

著者はさらにそこから一步進んで、中世の「里山空間」利用の実態を、網野義彦の主張したいいわゆる「山野河海」の無縁性と関連させる理解に疑問を投げかけている。

まず中世荘園における「山野河海」を、個々の荘園支配に連なる荘園領主・荘官・荘民の重層的な利用が公認された地域共有的な「ローカル・コモンズ」

にあたるとする。そして「里山空間」の共同利用慣行は、自然との共生のなかで牧歌的に育まれてきたのではなく、中世村落による地元での実行使とそれを保証する中央との結びつきによる政治力によって、地域共同体による独占という形で実現されてきたということが、本書では説得的に語られる。現代的なコモンズ論のなかに、中世史の文脈をもとに「里山空間」を位置づけた点が重要といえる。

さて、日本中世史においては「里山空間」についての先行研究は少ない。山野利用に関する史料については、その多くが中世荘園同士の境界をめぐる裁判関係文書や、徴税・相続などの帳簿・証書類であり、その利用のあり方よりはむしろ、その支配のありようについての主張が多く含まれている史料が中心となる。そのため、民衆の日常的な山野の利用についてはみえにくく、これまであまり議論されてこなかった。その結果、山野の所有に関する議論も、田など耕地に関する所有の議論から切り離されて、その特質を網野善彦のいう「無縁性」にもとめたり、実力支配のみが貫徹すると論じられたりしてきた（網野 1984・1987）。

このような先行研究に対して本書は、民衆の日常的な山野の利用の様子がうかがえる事例を多数あげて、民衆レベルの集団的な山野領有により中世村落の領域が定まっていき、その領域の保証は「無縁性」でも「実力支配」でもなく、「荘園制による領域支配」が基礎になっていたことを示す。網野善彦が山林の「無縁性」の根拠としてその聖域性・アジール性を強調したことについては、人びとが権力から逃れて「山林に交わる」例が警察・軍事活動から逃れるための短期的な避難であることが多いことを指摘したうえで、そもそも領主権が複雑に絡んでいた山野・山林を「無縁」とすることは論理の飛躍として、批判している。

このような著者の主張は「里山空間」における共同利用のあり方を、安易に「網野史学」的な「無縁性」と結びつけてきた先行研究への批判といえる。また同時に、近年の荘園研究の主流が、立荘の経緯など、荘園に対する中央権門からの働きかけのみに注目が集まり、現地や村落のありようが看過されがちであることについても鋭い批判となっているとい

えよう。

現代において「里山」とはある意味、人間活動における「自然との調和・共生」についての象徴の一つとなっているといってもよいだろう。だが本書によれば、この「調和・共生」は決して最初からめざすべき目標だったわけではなく、さまざまな条件が重なって偶然に成立し、偶然に保持されたものであるという。偶然条件がそろったために、成立・保持が可能であったというのであれば、その条件が崩れれば失われるということになるだろう。

このことは、逆説的に、地球環境問題において地球研がとっている、「超学際」的アプローチの重要性を示しているといえよう。「超学際」とは環境問題を解決するにあたって、自然科学・人文科学・社会科学の文理融合による学際研究にとどまらず、行政機関や地元住民など社会における利害関係者と連携して問題解決をめざす、そんなアプローチとして筆者は理解している。いってみれば、「里山」に代表されるような持続的に資源を利用できる環境の保持のためには、在地と中央の政治的な関係、さらに生業・流通といったものを含めたさまざまな条件の整備と、それを支える利害関係者の合意が必要であることが、本書によって示されているのである。

引用文献

- 網野善彦『日本中世の非農業民と天皇』岩波書店 1984年
 網野善彦『増補 無縁・公界・楽—日本中世の自由と平和』
 平凡社 1987年
 水野章二『日本中世の村落と荘園制』校倉書房 2000年